

医療タイムス

週刊 医療界レポート

2009年5月18日

No. 1917

特集／病院の防災対策

災害拠点病院でも 基準満たすのは6割弱

—緊急課題の耐震化促進に予算枠を拡大へ—

Interview

若い医師が来なくなるような病院づくりを
辞めよう—国公立病院の院長(仮称)村田氏

村田英之氏

Close up

10年経ってついに山が動き出した

国公立病院協会理事長
東京大学医学部長

江川滉二氏

NEWS

「国民皆保険制度の抜本的見直しを」 医病会の池田理事長
R誌別見解等掲載

地域医療や介護職員の処遇改善などに配分
09年度補正予算案



医療法人社団裕和会
長尾クリニック院長
長尾和宏氏

医療の閉塞状況を打破するには 個人が動くしかない

○：「高校3年のときに父を亡くして、死に強い関心を持つようになった。これが医師の道を選んだ動機だ」。兵庫県尼崎市の長尾クリニック院長、長尾和宏氏は外来診療のみならず在宅医療にも力を入れ、年平均40人を在宅で看取る。「住み慣れた家で、家族に見守られながら『ありがとう』と微笑んで迎える最期」。そんな最期をかなえてあげること、使命感を見いだしている。

長尾氏の理念は「信頼される地域のかかりつけ医」。常勤医師6人、非常勤医師4人、看護師約20人、理学療法士5人、放射線技師2人、臨床検査技師1人など70人超の職員を擁し、内科、消化器科、循環器科、リハビリテーション科などを開設。

年中無休の外来診療を平日4診、日曜・祝日は2診体制で運営する。

学生時代から地域医療への関心が深かった。「社会研」という無医村地区研究会に所属。佐久総合病院の発展に貢献した若月俊一氏

(故人)に憧れ、夏期休暇や冬期休暇ごとに無医村である長野県下伊那郡浪合村で、住民の血圧管理、健康教育を行った。長尾氏は「この経験が今の在宅医療のルーツになった」と振り返る。

○：長尾氏は大学卒業後、大阪大学医学部第二内科に入局。2年間の救急病院での研修を経て、大阪大学医学部附属病院、市民病院などで勤務医生活を送っていた11年目に、阪神淡路大震災が発生。同年に独立開院した。「毎月、時間外勤務が200時間を超えていた。過重労働からの脱出が独立の理由」。しかし、それだけではなかった。震災で搬送される多くの被災者を診ながら、個人の力を確信するようになった。「国家も行政も自衛隊も当てにできない状況では、個人で動かないと状況を打破できない。それには自由に動ける開業医になること。開業医の活動には無限の可能性がある」

開院するクリニックを先輩から引き継ぎ95年、尼崎市の雑居ビル2階に開院した。15坪のスペースで、01年まで診療。

手狭になったので「小学校の体育館のよくな広い所」を探し、銀行の閉店店舗を紹介され、現在の場所に移転した。

○：通常、複数医師によるクリニック運営は考え方や手法の相違などがネックとなり、継続が難しいと言われている。長尾クリニックではどうか。「医師の教育の場として機能させている。医師として伸びるにはモチベーションが最重要。会合や勉強会に積極的に出席させるほか、私が相当なエネルギーを費やして育てている。4人の独立開業医が果立っているが『困ったら長尾の良いところを思い出ししてくれ』と言って送り出した」

長尾氏は国会内や県の委員会に招聘されるなど、医療政策へ提言を求められる機会も多い。しかし、あくまで、町医者。を標榜し続ける。増患対策にはテクニクを駆使しない。「増患対策は、一人ひとりに心をこめて治療する以外にない。医師の魂を治療にどう入れるかの問題だ」

1958年香川県生まれ。84年東京医科大学卒業後、大阪大学医学部第二内科入局。聖隷病院、大阪大学附属病院、市立芦屋病院に勤務。95年長尾クリニック開院。99年医療法人社団裕和会会長尾クリニックに移行。日本医師会認定産業医、日本消化器内視鏡学会専門医・指導医、など。著書「町医者冥利」はじめての在宅医療「禁煙で人生を変えよう」(近刊)